

会に参加し活動などについて情報交換を行う。

3 自治組織の類型化

表1のデータを基に数量化Ⅲ類による類型化を行った(1~3軸, 累積寄与率 66.8%)。第1軸は「問題点(現在-将来について)」、第2軸は「活動内容数(多-少)」、第3軸は「活動内容(生活-生産)」と解釈できた。

これを用いて自治組織の類型化を行うと、「青年会」、「農近ゼミ・婦人会・若妻会」、「老人会・耕心会」、「壮悠会」に分類できた。この分類は活動内容や抱える問題点も考慮したものであり、単に会員属性のみで区分した場合とは異なり、組織自体の村内での役割の類似性も反映したものとなった。

IV 村内自治組織の変遷とその要因

各自治組織の変遷過程を図2に示す。第1次入植('67)が行われた直後に生産調整が開始され、それ以降の村内農家の経営形態は転

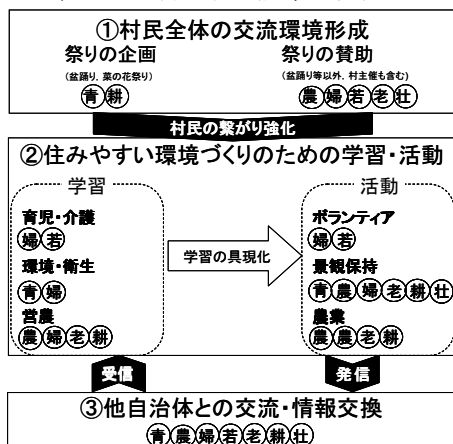


図1 自治組織の機能

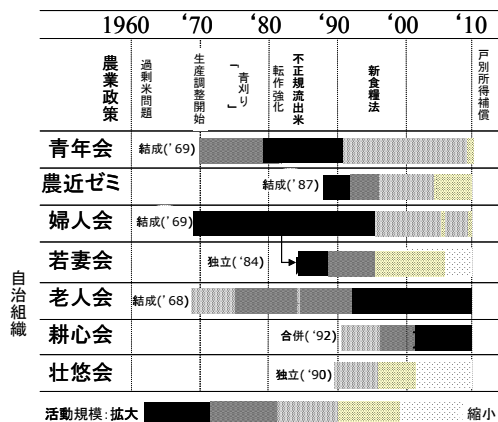


図2 自治組織の変遷過程

作順守派と過剰作付派に分かれた。しかし、これによる自治組織の変遷への影響はなかった。以下、各自治組織の変遷要因を解明する。

1 青年会・農近ゼミ

生活に関する活動を中心に行う青年会は1969年に結成された。また1987年には、入植2世を対象に営農学習を目的とした農近ゼミが結成された。農近ゼミ発足当初は両組織の掛け持ち会員がいたが、1990年に農近ゼミに「ひまわりロード整備事業」が加わったため、掛け持ち会員が農近ゼミに流出した。

現在は両組織とも会員数が減少傾向にあるが、これは入植1世と異なり、若い頃からの地縁が形成され、自治組織への加入の必要性が薄れたことが要因といえる。これに伴い、両組織とも活動規模も縮小傾向にある。

2 他の自治組織

婦人会は1969年に結成し、1984年には若妻会が独立した。この要因は、入植2世の結婚による婦人会会員の大幅増加を受けて、入植2世世代が若妻会として独立したからである。現在は青年会・農近ゼミと同様に、会員数が減少傾向にあり、活動も縮小傾向にある。

老人会は1968年に親睦と生活に関する活動を目的として結成された。また1990年頃からは、リタイアした入植1世が新たな生産活動(花植えや椎茸栽培等)の機会として耕心会('92)を結成した。現在は両組織とも入植1世が活動主体となっており、活動規模は拡大傾向にある。なお、ボランティア活動(福祉施設訪問や読み聞かせ等)を行っている壮悠会は、活動を維持していくため、耕心会との合併を検討していることが明らかとなった。

V まとめ

本研究では八郎潟干拓地における自治組織の実態把握、機能評価と類型化、及び変遷プロセスとその要因の解明を行った。

これにより各自治組織は村の生産及び生活を支える上での多様な役割を果たしていることが明らかとなった。しかし、自治組織の持続性には不安が残るため、今後は大潟村での自治組織の再編モデルを検討したい。

[参考文献]

- 1) 山野明男(2006):「日本の干拓地」, 農林統計協会
- 2) 大潟村村政要覧, 各組織記念誌5報他